

学校経営ビジョン

“「つながり」を学ぶ そして、学ぶことを「喜び」に”の実現を目指す学校

◎ つながりを学び、生かすことを通して、自己有用感を高めるとともに、感謝したり貢献したりする心や態度を育む。

1 相手意識・目的意識のある礼儀作法の習得（挨拶、会釈、言葉遣い）→良識ある社会人へ

- ただ「挨拶しなさい」「会釈をしなさい」と言うだけでなく、何のために挨拶や会釈をするのかという目的や意義、どのようにしたらよいのか(相手意識)を考えさせた上で、実践させる。

2 異世代、地域住民との交流の促進→様々な共同体への所属意識と自己有用感の高揚

- 本年度より、本校は、学校評議員制度からコミュニティー・スクール(学校運営協議会)に移行する予定である。
→趣旨は別紙参照。
開かれた教育課程、教員の働き方改革等の視点から、保護者を含む地域住民の「教育の当事者」としての意識高揚を図り、「教育(人づくり)は学校だけが担うものではない=学校観の変革」という風潮を高めていく必要がある。そして、これは地方創生(持続可能な社会の構築)の取組と一体的に推進していくことが望ましい。
(具体的な取組案として)
 - ・ 学校支援ボランティアを導入、拡大する。(読み聞かせ、語り部、学習支援、丸付け・印刷等の教員業務補助等)
 - ・ 総合的な学習の時間や特活、道徳科(ふるさと学習、キャリア教育等)において、地域住民の活躍の場や児童が地域のために貢献する場を創造していく。

3 児童の実態に基づいた道徳教育、人権教育の充実→多様性への理解と順応

- 人間関係や友達の見方が固定されがちな子ども達へ、「人は成長する(変わる)」ということを具体的に教えることで、可能性を尊重したり、偏った見方を改めたりすることの大切さを伝えていく。
- 多様化する社会を生きていくために、「知る・気付く」→「考える・議論する」→「暫定的な理解・判断のものさし=価値観を得る」のサイクルを重視した学習を展開しながら、多様性を認め、正解ではなく納得解を追究しようとする資質・能力を身に付けさせる。

4 学校での学びを家庭や地域でも発揮する場の工夫→「いつでも、どこでも、誰にでも」へ

- そもそも「学校で何を学んだか」は、家庭や地域に伝わりにくい。その認識で、学級通信や学校便りを出していきたい。学びの意義や指導者としての思いを伝えることで、学校教育への理解を促し、家庭や地域での共同実践につなげたい。(学校で何があったかという事実[記事]はHPで発信する) 但し、留意すべきは、学校がやっていること、学校の考えが社会情勢や一般常識、公共性と離反しては本末転倒となる。
- 教育を学校・教室だけで完結させようとする(子どもを外に出さない、狭い範囲での特別ルールを作り守らせる等)と、陰日向や人を見て変えるなどの態度を生み出しやすい。「大切なこと」は“いつでも、どこでも、誰にでも”自然にできることが望ましいことから、児童が日常生活と具体的に関連付けができるような手立てを考えていく必要がある。

★ 学級経営の極意は「笑顔」である。～先生は、いつでも笑ってくれる～

- ピシッと叱っても、笑顔で締める。

○ 笑顔は「あなたを認めているよ、受け容れるよ」の意思表示です。

★ 褒めるときは本気で。そして、「価値付け」してあげることが重要。

★ 正論よりも、相手意識を優先して。～伝わらなければ、ひと工夫を～